
交差する世界

五十嵐 ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交差する世界

【Nコード】

N8631W

【作者名】

五十嵐 ゆう

【あらすじ】

人体錬成…それは錬金術師の中では最大の禁忌とされてきた。

しかし、人間は何も学ばず、過ちを繰り返す――

交差する歴史（前書き）

次回、本編

交差する歴史

やあ！初めましての方は初めまして

作者です

今回はハガレンの二次創作ですが、原作のキャラは真理しか出てこない予定です

この世界観は、ハガレン原作と現実世界が混じった世界です

舞台は日本、アメストリスの公用語は英語という設定で進めていきます

では、この世界の歴史を紐解いて行きましょう

1933年

第二次世界大戦勃発

この時期、アメストリスではエドとアルが人体錬成した辺り

1941年

太平洋戦争の開戦と共に日本は錬金術の戦場での使用を決定
エド20歳、アル19歳

1945年

錬金術を使用し、エネルギーを生成する日本軍と

強力な兵器やらなんやらを使う連合国軍

戦況は泥沼になると思われていた

1945年8月

原爆投下

6日に広島、9日に長崎

14日、昭和天皇は無条件降伏を決定

15日、ラジオでその事が伝えられ、第二次世界大戦は終結した

1946年

日本軍は解体され、日本国憲法を制定

1950年

警察予備隊の発足
後の自衛隊となる

1990年

バブル崩壊
それに伴う不景気で錬金術の悪用が増加

市民の自衛の為、拳銃の携帯を許可

：と、こんな感じかな？

書いてみたら割りとどうでもよかった

じゃあ次から本編です

交差する歴史（後書き）

拳銃のくだりは蛇足だと思ったりしなかったりしたりする

真理の下す絶望（前書き）

人体錬成を行なった錬金術師（――）

彼は目が覚めると、女になっていた…

はい、そうです。ち○こを持って cameました

しかし彼はその時の記憶を無くした、原作8巻以前のアルミみたいな状態

真理の下す絶望

……僕は『ボク』

人称でしか呼ばれない

ほら、よくあるじゃん。名無しの主人公ってさ

名前考えるのがめんどくさかった訳じゃないんだからね!!
／／／

とりあえず、この世界の歴史を君は知ってるかい？

知らないなら出直してきて、1話を見て

……見てきたね？

じゃあそろそろ起きるね、股間痛え…

ボク「……なんだ今の夢……」

ボク「……風邪かな？声が変わだな…」

具合が悪い時は、あんな風に変な夢を見る

とりあえず僕は洗面台に向かった

ボク「……誰？」

鏡には、可愛い女の子が写っていた

ボク「……え？え？訳が分からない」

黒い髪に、茶色と黒が混ざった瞳

黄色みがかかった白い肌

そういった特徴は変わってないが、明らかに僕は女になっていた

ところで髪長くな？

僕は髪を短く切った筈だ

一晩で腰まで伸びるのは有り得ないだろう

ボク「…昨日なにしたっけ…？」

確か、昨日は

1年前死んだ彼女を、生き返らせようと人体錬成を試みた

…これが原因だな、多分

何の因果でこうなったかは、知らないけど

ボク「そういえば、さっきから股間がいずいんだが…まさかね…」

触ってみた

ボク「ひゃうん！」

……泣きたい…

俺の股間の44マグナムが消失していた事と
なんか変な声が出たことに対して…

ボク「神様僕なんか悪いことし……人体錬成したね…」

どうすればいいかな？

あ、そうだ…様子見に行かなきゃな

.....

『それ』は人間とは呼べなかった

手が2本、ただし一本は欠損している

足が4本、全部がバラバラな方向を向いている

口から食道が見えており

その顔は黒く焦げたような物だった

ボク「…そんな…」

嫌悪感と吐き気に襲われた

ボク「う…あ…」

叫ぼうとするも、嗚咽によって拒まれた

ボク「あああああああああ!!」

そして僕は叫んだ

錬成陣を柱の傍に描く

柱を棍棒に変える、そんな単純な錬成

その錬成陣に手を叩きつける

ボク「……あ？」

術が発動しない

その後も何度か試みる

ボク「むう…」

ちよつと冷静になった

ボク「なんなんだろう…？」

真理の下す絶望（後書き）

続く

真理の下す絶望2

ボク「……うゝむ……わからないことが沢山だ……」

分からないことは分かるようにするのが科学者だが、流石に何のヒントも無しに調べられる訳も無く

ボク「……何か文献にヒントないかな……って」

本棚を漁る

人体錬成について書いた本は異常に少なかった

多分、暗号化されてるのだろう……そうなると面倒だぞ

人体錬成をした著者が分かればいいが、勿論そういう人とそうでない人が明記されてるわけもなく

ボク「むう……」

……この唸り声は癖だ

いつもは『キモイ』とか言われる

まあ、この姿なら可愛げがあるんじゃないか？

現実逃避気味にそんな事を考えつつ、錬金術師の親父にメールを打つ

『錬金術について、助けて』

送信

ボク「ふう…」

僕は煙草に火をつける

ボク「げほ…」

正直言うとかかなり動揺してる

煙草吸えば落ち着くかな？って思った

ちなみにこの煙草は1か月前親父が忘れてったものだ

別に取りに来る必要性を感じなかったので、又の機会に持って帰るとの事だ

勝手に吸っていいのか？って話だが

家族だから許せる事、家族だから許せない事、これは前者だろう

怒られたら買って返せばいいかな、とか思ってたりする

ティロリロリン

返信来た

『どうした?』

ボク「メールで説明するのはめんどくさいな…」

『とりあえず来て』

ボク「送信、と」

ボク「ふう…」

僕は煙草を吸う

…落ち着いてきた

返信きた

『今から向かう』

ボク「そういや、なんで術が使えないんだろう…」

あれから色々な錬成を試した

全部失敗した

ボク「そしてこの女体化が一番の謎だ…うーむ…」

父「来たぞ」

ボク「おっす」

父「……どちら様ですか？」

ボク「どうもボクです。錬成の失敗でこうなつたと予想しています」

父「…何を錬成しようとした？」

ボク「人体錬成を…」

父「人体錬成！？」

ボク「おう！ばっちり失敗したぞっ！」

あれのショックからか、テンションがヤケクソ気味だ

それをふざけてると見受けられ、殴られた

ボク「痛い！！……あ、ちょっと落ち着いた…」

父「人体錬成など…！お前は…！」

ボク「……分かってる…」

父「……………」

父「それで…人体錬成とどういう因果でそうなった？」

ボク「分らん…なぜか術も使えんし…」

父「……じゃあ、私の方でも調べるが、無理するなよ？」

ボク「ん、了解」

真理の下す絶望2（後書き）

続く

真理の下す絶望3（前書き）

主人公は20歳〜22歳

真理の下す絶望3

ボク「……寝てた……」

ボク「…しかし、どうするか……」

この現象の原因や理論を知りたい、あわよくば戻りたい

ボク「……そこらの本でも読もう……」

ボク「…鍊成陣…力の循環を示す円に構築式…」

ボク「円……」

ボク「…っ!」

そして僕の中の膨大な知識を思い出す

どこでその知識を手にしたかは思い出せないが…

ボク「そうだ……思い出した……」

僕は手を合わせ、目の前の柱に両手を叩きつけた

すると柱の一部が変形し、木製の棍棒が出来た

ボク「技術が下がったと思ったら、逆に上がってた、みたいな？」

ボク「しかし、凄いレベルアップだな。レベルアップも吃驚びっくりだよ」

ボク「錬成陣を必要としないとはな実に便利だな」

ボク「術については解決だが、この女体化の原因はなんだ…」

ボク「……うーむ…リバウンドで彼女と混ざったとか…」

ボク「人体錬成の実例が無いから判断のしようがねえなあ…」

ボク「そもそもなんで人体錬成についての書物が少ねえんだよ…」

ボク「しかもその本に書いてあったことも理論だけで、結果がねえしよ…」

ボク「……はあ……」

気分転換に外へ出た

ボク「外に出るの久しぶりな気がする…」

ボク「ヒツキーか俺は…」

中坊「ねえ君」

ボク「ん？」

男子中学生（と思われる）に声をかけられた

ボク「……何？」

中坊「君可愛いね、ちょっと遊ばない？」

数秒ポカーンとなって、そして気づいた

僕は女になっていた

しかしこの中坊はなんなのか

大人に対して舐めすぎじゃないか

確かに僕は大学を1年で中退した

だけど、それでも、年上に対しては敬意を持って欲しい

つか高校はちゃんと卒業したんだから、そんな駄目人間な訳ではない

ボク「いえ、私忙しいから」

中坊「いいじゃん、ちょっとだけだからさ」

腕をつかまれる

力弱くねコイツ

ボク「離して」

ただどなんか怠いし、このままではイライラで此奴を殴り飛ばしてしまいたいそう

中坊「えー…」

僕「離せ」

僕は指を2本立て、そして1本にする

中坊「だ☆め」

僕「離してください」

指を折る

中坊「諦めなよ」

そして僕は手を払いのけ、ボディীবローを食らわせようとしたその時

警官「ちょっとそこのカップル」

この警官は脳髓がいい具合にとろけてるらしい

ボク「なんすか!？」

ブチギレ寸前である

警官「君たち、学校はどうしたんだね」

ボク「君たちって、私も？」

警官「当たり前だよ」

ちよつとカチンと来ちゃったかも

ボク「……………」

警官「君たち、何処の学校だね? 全く、こんな堂々とサボって…」

ボク「…少し待ってください、このお方はどうか存じませんが、私は学生ではないです」

小学生からおじさん呼ばわりされてるレベルである

警官「はあ? どう見ても14, 5の子供にしか見えんが…」

多分、女体化の時に幼い容姿になったのだろう

そういう結論には至ったが、それでも溢れる怒りを抑えられず

気づいた時には手を合わせていた

しかし、攻撃の前に理性は戻り

錬金術で逃走を謀った

ゝ家ゝ

ボク「……あー……」

僕はこの後、そのへんの紙屑を固めて木刀で殴ったりした

真理の下す絶望3（後書き）

続く

偽りの刀に魂は宿るか（前書き）

「怖くて本物の刀なんて持てません」
でも拳銃は持つてる主人公

偽りの刀に魂は宿るか

ボク「あー……」

相も変わらず、この現象の原因は不明

ストレス発散に使った木刀”爽”をベットに立てかけ、ベットに寝転ぶ

この木刀は中学の修学旅行で買った物で、土産物にしては丈夫だったので色々手を加えて今も愛用している

ボク「…さーて…どうしょっかなー…」

なにせ予想外の予想外な事態だ、どうもしようがない

(着信音…only my RAILGUN)

メール来た、この着信音はロリコンの友人(氏名…中上大樹)

『朝起きたら女になってたと聞いたぜよ、今から向かう』

いきなりですか

中上「よお」

ボク「おっす、適当にゆっくりしていつて」

中上「言われなくてもそのつもりだよ」

中上「なんかエロゲでそんなあったよね」

ボク「そんないくらでもあるわ」

中上「ゲームだと、この後レイプ展開だね」

ボク「レイプされんの俺じゃねえかよ…いやすぎるぞ…」

中上「こんな感じで？」

いきなりベットに押し倒された

ボク「…いきなりやめろよ…いくらベットでも痛いんだぞ…」

中上「ごめんごめん」

ボク「あと手が痛い…離せ」

中上「えー…」

ボク「えー、じゃねえよ。マジでやる気か？ヘタレロリコン」

中上「カチンときちゃったあ…やってやる!」

ボク「おいやめろ!」

中上「もう遅い」

身長の関係と、こいつ結構力強いので碌な抵抗が出来ない
両手は抑えられていて錬金術も木刀を取る事も出来ない

（事後）

中上「はぁ…はぁ…」

ボク「……………」

憎しみが募っていく…

中上「待て…木刀をおろせ…」

ボク「スクワルタトーレ！」

中村「木刀でそれやるな！」

ドカバキ

中村「っあああああ！！！！」

ボク「エターナルフォースブリザード！！」パンツ

僕は窒素を結合させる

中上「痛ええええええええええ！」

ボク「…今日はこの辺で勘弁してやるか…」

中上「慈悲深いな……痛……俺は死を覚悟したぞ……」

ボク「こんなでも彼女が死んだときに延々続く懺悔を聞いてくれた友だ」

中上「ああ、あれ悪かった自覚はあるんだ」

ボク「後から冷静になったら、ね」

中上「じゃあ、俺は病院に行くから……」

ボク「じゃあな」

偽りの刀に魂は宿るか（後書き）

続く

偽りの刀に魂は宿るか（前書き）

やつと進むよ

偽りの刀に魂は宿るか

僕は木刀を手入れして、壁に立てかけようとした

すると、玄関からバキンッという音がした

ボク「なんだ!？」

木刀を持って玄関に行くと、小型サブマシンガンを持った男が3人立っていた

サブマシンガン、拳銃弾をフルオートで^{連続して}発射する近接戦闘用の中型の銃である

ただ、民間でのフルオート銃の所持は禁止されてる為、セミオートのみのしか民間では売ってない

僕は木刀を構えた、それと同時に足を撃ち抜かれた

ボク「痛っ!!！」

男A「目標は射殺だったな…死ね——ッ!？」

言い終わる前に木刀で男の手を攻撃した

そして銃を拾い3人を撃つ

男A 「っ！ ああああああ！ 」

男B 「……」

男C 「痛ええええええええ！」

1人は意識を失った、恐らく死亡した

ボク「……っ…」パンツ

鍊金術を使い、床に穴を開ける

AとCは穴に落ちる

銃を二つ持ち、穴の中に向ける

男A「おい！拳銃！拳銃使え！」

男C 「使わないと思って置いてきた！」

男A 「ばっか！お前——」

二丁拳銃で乱射する

ボク「……はあ……はあ……」

弾切れした

二人とも蜂の巣になった

近所のおっさん「なんだ！？銃声がしたぞ！」

ボク「…助けて」

おっさん「足を撃たれたのか？早く救急車を…！」

ボク「傷を見てください…貫通ですか…盲貫ですか？」

おっさん「え？…後ろに傷はない、盲貫だ…」

ボク（ここに切開手術が出来るような設備はない…救急車に頼るか…）

おっさん「もしもし、救急です。中学生くらいの女の子が足を撃たれました…」

ボク（…ああ、僕の容姿は完全に女子中学生なんだな…）

おっさん「すぐ救急車が来るぞ…頑張れ」

ボク「…はい……」

15分程度で救急車は来た

ちよつと入院する事になった

とある国、とある都市、その中の暗闇に閉ざされた一室

「邪魔になるから始末しようとしてたが…これは思わぬ収穫だな…」

「…というと？」

「ああ、あの映像見てなかった？錬金術師なら、え？って思うと思うんだが」

「映像？」

「見てなかったのね…錬成陣無しに錬成をしたのが写ってたんだが」

「錬成陣なし！？…賢者の石…」

「違うね、錬成反応が変わっていなかった」

「どういう事ですか？」

「真理を見た錬金術師だ…可能性は少しでも上げておきたい。ならばあれを使わん手はない」

⋮

偽りの刀に魂は宿るか（後書き）

続く

家族、友達（前書き）

いよいよ物語が急変していきます、多分

家族、友達

——記憶

ボク「…何処此処？」

??「よお」

ボク「誰？」

??「おお！よくぞ聞いてくれた！！」

真理「私は、お前たちが『神』と呼ぶ存在」

「或いは『世界』」

「或いは『宇宙』」

「或いは『真理』」

「或いは『全』」

「或いは『一』」

「そして」

真理「『俺』は『お前』だ」

ボク「？」

真理「ようこそ、身の程知らずの馬鹿野郎」

ボク「え？ ちょ？」

トビラから、なんか手？ が出てくる

真理「真理を見せてやる」

大量の情報を押し込められてる様だ

頭が痛い

助けて

頭痛い

ボク「……っ」

真理「どうだった？」

ボク「……これが、真理……？」

真理「ああ、通行料は頂くぞ？」

ボク「通行料？」

真理「ああ、通行料」

股間から血が吹き出す

ボク「――!?」

真理「等価交換、だろ？錬金術師」

――そして僕は意識を失った

ボク「：そんな感じの事を、足撃たれたショックで思い出した」
ちなみに病室には僕一人だ

ボク「中学校？」

父「ああ」

ボク「なんでだ？」

母「……なんとなく？」

ボク「いくら僕が温厚だからってキレル時はキレルぞ？」

僕は、一応温厚ではあるが。Sっ気がないといえば閻魔に舌抜かれてもおかしくない

妹「お兄ちゃん、私と同じ学級だって、クラス同じだといいね」

ボク「ソウダネ」

ボク「アメストリス辺りに調べに行こうかな？ってちょっと思考を掠めたりしたが…」（パスポートがない）

妹「英語わかるの？」

ボク「舐めるな」

妹「じゃあ問題」

ボク「ん？うん」

妹「次の英文に自分の立場で答えなさい」

ボク「…」

妹「How much do you？」

ボク「ごめん意味が分からない」

妹「ほら！わからないじゃん！！」

ボク「…あのさ…無理矢理訳すと『貴方はいくらですか?』」

あと、英文法では文に動詞を1つ入れなきゃいけないんだ」

妹「うるさい!」

ボク「貴方はいくらですか、って聞きたいなら『How much are you?』だよ」

妹「うるさいうるさい!そんなのどうでもいいじゃん!」

ボク「貴方はいくらですか?って何?売春?」

妹「。(。㇏。)」

ボク「ひゃっひゃひゃ!! It's so exciting!
(すごい楽しい!!)」

家族、友達（後書き）

続く

平和（前書き）

——瞬きの平和を享受し、全ての困難を忘れ去ろう

今まで地の分は一人称形式でしたが、これからは三人称形式で行きます

（でも主語は『僕』です）

平和

僕の偽名は「鈴科百合子」に決まったらしい

ボク（どこの学園都市最強だ…）

ボク「鈴科百合子です。よろしくお願いします」

休み時間

モブ「前どんな学校に行ってたの？」

ボク「普通の共学です」

モブ2（以下モブと統一）「兄弟居るの？」

ボク「妹が一人居ます」

モブ「……ねえ」

ボク「なんですか？」

モブ「なんで敬語なの？」

ボク「初対面だから？」

モブ「じゃあタメ口で話してよ」

ボク「いいけど、敬語をやめると一人称が『僕』になるんだよね」

僕は敬語の時は一人称を『私』にする癖がある

モブ「変なの」

ボク「変かな？」

平和（後書き）

続く

狂気（前書き）

ドSだからこそ打たれやすい

打った後どうなるかは想像に難くない

狂気

モブ「今日どっか行かない？」

今話してるのは、「敬語やめない？」と言ってきたモブさんだ、名前は新島駒子

ボク「どこへ？」

新島「うーん……どこがいい？」

ボク「家」

新島「……？」

ボク「マイホームが一番落ち着く」

新島「……………」

何言ってるんだコイツ、というニュアンスの沈黙が流れたが、僕は敢えて流した

〳主人公の家〵

ボク「ここが僕の家だ、ゆっくりしていくといい」

新島「あ、はい、お邪魔します」

ボク「ペットボトルのお茶と缶コーヒーどっちがいい？」

新島「えっ？」

ボク「えっ？」

ボク「冗談です」

~~~~~

ボク「嗚呼、このまろみ……」

新島「まろみ……？」

ボク「いや、なんでもない」

新島「ふうん……」

何がふうんなのか

ピンポン

ボク「ん？誰だろう……出てくる」

新島「いってらっしゃい」

ボク「はい、誰？」

女「こんにちは、〇〇保険の者です。ご主人様はいらっしゃいますか？」

ボク「私です（キリッ）」

女「えっ」

ボク「え」

女「あの…おうちの方はいらっしゃいますか？」

ボク「私が、私たちが、おうちの人だ！（キリッ）」

女「ふざけないでください！！！」

ボク「キレるの早いなオイ！ぶはっ」

女「殺すぞクソガキ！」

ボク「いやー（棒読み）殺されるー（棒読み）」

女「クロス」

ボク「はっはっは！………は？」

すると女性はなんか化け物に変身した

キレるの早すぎ！コイツ絶対中卒や！

ボク（……何だこれ？合成獣？<sup>キメラ</sup>）

女「シネ」

するとキメラな女性がこっちに突っ込んできた、思いっきり後ろに跳んで回避

ボク「何だ何だよ何ですかあ！？神様、僕なんか悪いことしましたあ！？」

女「ダメッテ、ネテイロ！」

すると殴りかかってきた、キメラな女性が

避けたら後ろの壁が半壊した。コンクリートだぞこれ…

ボク「死ぬ！本気で死ぬ！！」

僕は手を合わせた、力加減など考えていなかったの  
で掌が痛くなったがそんな事は知ったことではない

ボク「おうらい！」

変な掛け声と共に木を錬成する

女「ナニカシタカ？」



明らかに挑発するような声で女性が言った

ボク「何もしてないよ？ 本当になんでもないから」

女「ジャアシネ！！」

すると女性がタックルをかましてきた

横に軽く避ける

女「チツ……ン？…ナンダ？イキガ…」

ボク「ここで問題、炎の不完全燃焼などで発生し、

ヘモグロビンと結びつき呼吸障害を起こす物質

はなんでしょう」

女「…一酸化…炭素…」

僕は即席で作った酸素の入ったビニール袋を口に当てながら言う

ボク「ゴホッ…正解い！」

女「テ…メエ…」

ボク「あひゃひゃ！それじゃあ正解者の為のサービス問題い！」

僕は手を合わせる

ボク「一酸化炭素（CO）は可燃性である。丸かバツか」

女「ッ！ヤメー」

ボク「正解者には優しい死を」

手を床に叩きつけ防御し、そして再び手を一瞬合わせた後

爆発が起きた

ボク「アヒヤヒヤヒヤヒヤアア！！葬式に花火とは愉快的な葬儀じゃねえか！！」

女「ッアアアアアアアアアアアアアアア！！」

ボク「まだ生きてるうー？いいねいいね！そうじゃなきゃ！」

女「コノッ！クソガッ！」

ボク「まあいいや。面倒臭くなってきた。そろそろ死ね」

手を合せ、相手の頭に触れた。次の瞬間女性は痙攣を起こした

女性は生命活動を停止、死んだのだ

新島「……あの……」

ボク「見てたのか……」

新島「貴方も、魔法少女なの？」

ボク「!？」

## 狂気（後書き）

続く

この世界に魔法なんていう概念を増やす気はありませんのであしからず

奇跡も、糞も、ないんだよ

どこか

ボク「ふう……コーヒーはいいね、このまろみが」

????「そうだな、まろみがいい。苦味のみを肯定する奴は素人だ」

新島「コーヒーなんて苦いだけだと思う」

ボク「苦いだけ？ ふっ……。苦味と風味と味があるんじゃないか、何を馬鹿な事を」

????「まあ、その話は二人になったときにでもしようか」

ボク「了解」

ボク「魔法少女、だっけ？ 恵方巻きの化け物に頭食いちぎられたりとか、そんな感じだろ？」

新島「いやだよそんな最期」

????「そんなの絶対おかしいよ」

ボク「で、なんで僕がそんな結滞けったいなものに間違われるの？」

新島「だってあの光は魔法でしょ？」

ボク「光……? ……練成反応のあれか?」

????? 「それにしても魔獣キメラを殺せるなんて、相当の錬金術師なんだね君は」

ボク「まあそれなりにはね」

新島「錬金術師?」

ボク「おう」

????? 「魔法少女とは、あの女性のように

何か知らんが化け物みたいになる奴を殺す為に、  
錬成陣を刻んだアクセサリー等を使って戦わせるシステムの  
事」

ボク「ふうくん、興味ないね」

????? 「そうか」

新島「騙してたのね、あたしたちを」

ボク「僕は『魔法少女』になってくれて、きちんとお願いしたはずだよ?

実際の姿がどのような物か説明を省略したけど」

????? 「趣味が合うな、俺とお前」

ボク「そうだな」ククク

新島「ふざけないでよ！」

ボク「え！？ ネタ振りじゃないの！？」

新島「違うわよ！ なんのネタよ！！」

ボク「……さあて、僕は帰るよ。アディオス」

新島「ちょ——」

奇跡も、糞も、ないんだよ（後書き）

続く



## 真の力（前書き）

感情に身を任せた結果、世界を壊す程の力を手に入れた

## 真の力

「どこぞの廃ビル、その屋上」

ボク「居るんだろ？ 出てこい、そして名を名乗れ」

?? 「やあ、お嬢ちゃん」

ボク「名を名乗れ」

?? 「ちよっとおじさん達と来てくれるかな？」

ボク「誘拐犯？ そして3度目だ、名を名乗れ」

?? 「……ああ、名前ね。私は村上だ」

ボク「そうか、とりあえず 来てくれないかな？ には来てくれないと答える」

?? 「そうか、じゃあ……」

謎の男の周りに風が発生する、風圧で屋上についてる柵が飛ぶ

ボク「危なっ！」

僕は鍊金術で風を打ち消す

村上「真理を見た鍊金術師……一筋縄ではいかんな……」

ボク「……甘く見られた物だな——何故それを知ってる!?!」

村上「遅……」

僕はポケットを探る

ボク「拳銃置いてきた! まじっべー!」

いつも護身用に拳銃を携帯するのだが、忘れた

村上「喋ってる暇は無いぞ」

ボク「うおっ!」

風を出す、打ち消す

ボク「ちい! 面倒だ……」

相手は予備動作がない、恐らく錬成陣の書いた手袋を嵌めてるかなんかだと思う

村上「こっちの台詞だ……」

風速50 km/sの暴風が吹き荒れる

ボク「危なっっっ!?!?!」

打ち消す

カラン——と音がした

僕の指から指輪が落ちた音だ

ボク「あ——」

村上「ん？」

村上が拾った

ボク「返して」

村上「あ、大切な物？……一緒に来てくれたら——」

ボク「返して」

村上「いや、だから——」

ボク「返せ」

空気が変わっていく——

ボク「返、せ、——ッ！！！」

僕は手を合せ、右手を空へ掲げる

すると練成反応の紫電のような光が発生し

右肩から黒い翼が顕現する――

村上「――ッ!？」

ボク「カエセッ!！」

僕は村上の方に向き、地面を思いっきり蹴る

すると物凄い速さで村上に接近し、指輪を奪い返す

村上（――死ぬ!？）

そして、謎の力を使い村上は地面に伏せる

村上「クッ!」

村上は拳銃を取り出し、撃つ

連続して3〜4度程

しかし謎の力で弾丸は落下する

ボク「アヒヤッ！」

僕は急接近

村上「――」

村上はなにかを取り出す、しかし弾き落とされる

ボク「さあて、どう調理してやろう………ん？」

ボク「いいもん見つけた」

村上が落とした物、それは伸縮式の警棒だった

僕は思いっきり振って伸ばす

ボク「ひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」

殴る

殴る

殴る殴る殴る殴る

十数発殴つて

ボク「そろそろ楽にしてやろうかなあ……」

村上「助け――」

ボク「じゃあ命だけは助けてやる」

ボク「そうだな………脳幹切るだけで許してやろう」

村上「それ、は――ッ」

脳幹、大脳と脊髄を繋ぐ器官である

これを切られよう物なら、意識は永遠に戻らない

ボク「さようならあ……まだ来世♪」

村上「まっ――」

僕は手を合せ、村上の後頭部に手を乗せた

――村上は眠りに付いた

ボク「ふう……」

ボク「それにしても……これ（翼）分解するの凄い怖い……」

神経も繋がっている

ボク「いよいよ化け物じみてきたな……ははっ」

怒りに任せて余計な事しなきゃよかった、と思った僕であった



## 真の力（後書き）

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8631w/>

---

交差する世界

2011年11月29日23時48分発行